

## 1 再会

いまお読みした今日の箇所、三三章は、「ヤコブが目を上げると」という言葉で始まっています。新しい翻訳(聖書協会共同訳)では「目を上げて見ると」となっています。「目を上げて」そして「見る」、この二つの言葉で、ヤコブがいま事態に向き合おうとしていることが示されているように思われます。

しかしそれは、ある意味で、私どもには驚きです。なぜなら、神との格闘を終え、夜が明けたときのヤコブの様子が、こう書かれていたからです。

ヤコブがペヌエルを過ぎたとき、太陽は彼の上に昇った。ヤコブは腿を痛めて足を引きずっていた(三二・三二)。

これから想像すると、ヤコブは、とても、これから兄エサウに会うというような状態にならないようにも見えます。あんなに準備して来たのに(三二・四〜二二)、ここに来てこれでは、と思ってしまう。

あの強いヤコブは、神にさえ勝利したヤコブは、いま足を引きずっています。目はうつむき加減です。そこにいるのは、弱いヤコブです。勝ったのに負けたようなヤコブです。

そのヤコブが、いま目を上げて、見るのです。前を向くのです。これから起こることに覚悟を決めるのです。

先週、私ども、ヤボクの渡しでの、夜を徹した神との激しい取っ組み合いを読みました。それは私どもにとつて祈りを意味するとも申し上げました。神との格闘が、エサウと向き合う覚悟をもたらしたのです。恐れはまだあります。なくなったではありません。しかし、人間的な恐れと不安があっても、神は共にいます、その確信は大きいのです。

ヤコブが目を上げると、エサウが四百人の者を引き連れて来るのが見えた。ヤコブは子供たちをそれぞれ、レアとラケルと二人の側女とに分け、側女とその子供たちを前に、レアとその子供たちを、その後、ラケルとヨセフを、最後に置いた。ヤコブはそれから、先頭に進み出て、兄のもとに着くまでに七度地にひれ伏した。エサウは走って来てヤコブを迎え、抱き締め、首を抱えて口づけし、共に泣いた(一〜四節)。

これが再会の場面です。この中で、エサウが走って来てヤコブを迎えるところは、皆さんもお気づきのように、イエスの有名な譬え、放蕩息子の譬えを、思い起こさせるものです。これは後で取り上げます。

さて、遠くからエサウが来るのを認めて、ヤコブが取った行動は二つでした。一つは家族を三つに分けることでした。

これは、前にしたことと似ています。エサウに会う準備の一つとして、人間や家畜も含めて、行列を二つに分けて、危険の分散をはかったことを私ども知っています(三二・八)。ただここでヤコブは、自分の愛するラケルとその独り子ヨセフを、一番後ろにおいて特に安全をはかっています。非常に人間的な、ヤコブの人となりの一面が出ているところです。

もう一つは、ヤコブ自身が、この場合は先頭に立って、エサウのもとに着くまで七度もひれ伏したことです。再会の準備の段階から、すでに、ヤコブは、エサウを主人と呼び、自らを僕としていました。ひれ伏すことによつて、その関係を、はっきり示そうとしたということでしょう。ひれ伏した、ということ、エサウにはなく、神にひれ伏したと受けとる人もいます(カルヴァン)。前後関係からして、エサウをなだめようとしているわけですから、エサウにひれ伏したと取つかまわらないと思いません。この時もヤコブの不安は払拭されていないのです。

## 2 警戒するヤコブ

再会の場面は、簡潔というより簡単に描かれています。エサウは走り寄り、抱きしめるなど、喜びの感情を表していますが、ヤコブのほうは警戒を解いておらず、印象としては心から喜んでいいるふうではありません。「共に泣いた」とあるので、疑うわけではありませんが、再会後のヤコブの対応から、そういった印象を、私ども受けるのかも知れません。

そのヤコブの対応の仕方、例えば、一二節以下です。

それからエサウは言った。「さあ、一緒に出かけよう。わたしが先導するから」。

「御主人様。ご存じのように、子供たちはか弱く、わたしも羊や牛の子に乳を飲ませる世話をしなければなりません。群れは、一日でも無理に追いつくとみな死んでしまいます。どうか御主人様、僕におかまいなく先にお進みください。わたしは、ここにいる家畜や子供たちの歩みに合わせてゆっくり進み、セイルの御主人様のもとへ参りましょう」(一二〜一四節)。

要するに、一緒に行こうというエサウの誘いを断っているのです。その理由は子供たちです。あるいは家畜です。自分ではない。とくに家畜のことはエサウもよく知っているはずですが。ヤコブの受け答えは、いまの言葉で言えば、〈塩対応〉ということでしょうか。

ヤコブが、後から、遅れてでも行く、と言ったので、それを受けて、次の会話が二人の間でなされます。

エサウは言った。「では、わたしが連れてくる者を何人か、お前のところに残し

ておくことにしよう」。「いいえ。それには及びません。御好意だけで十分です」と答えたので、エサウは、その日セイルへの道を帰って行った。ヤコブはスコトへ行き、自分の家を建て、家畜の小屋を作った。そこで、その場所の名は、スコト（小屋）と呼ばれている（一五〇一七節）。

連れの者を何人か残しておこう、これは提案ではなく、そうするというエサウが決めたわけです。それもヤコブははっきり断っています。主人に対する僕の態度でないことは明らかです。

それだけではありません。ヤコブは、エサウにした約束も守っていません。遅れてでも行く、あなたのいるセイルに行くと言ったのですが、ヤコブはセイルには行かず、スコトへ行き、そこに自分の家を建て、家畜の小屋を作ってしまったのです。はじめから行く気などなかったようです。セイルはエサウの領土です。死海の南、エドムと同じです。スコトは、いまいるすぐ近くで、実際ヤコブは、そのままヨルダンを渡りカナンに入っています。

ここまでいうことを聞かないとなると、人間的に言えば、怒りたくなるのが普通でしょう。しかしエサウは、そんなそぶりも見せていません。どこまでもいい人です。対照的に、ヤコブはここでも、約束を破り、おべっかを使い、自分の利益は失うまいとしています。

### 3 神の恵みによって

二〇年前と同じです。考えてみれば、二〇年前も、エサウは、そうして長子の権利を奪われ、父の祝福を奪われたのです。とても二十年で忘れ去られる出来事ではないと思うのですが、エサウは寛大です。どうして、そんなふうにしていただけるのだろう。私ども皆の疑問です。

聖書に、その説明などありません。聖書はいつもヤコブにスポットライトを当てています。ヤコブが主題であるとすれば、エサウはそれを引き立てる背景（バック）にすぎず、私どもの疑問など、ここでは問題になりません。それでもあえて、今日の箇所から、エサウの気持ちを探り出すなら、次のようなところがヒントになるように思います。

エサウは言った。「弟よ、わたしのところには何でも十分ある。お前のものはお前が持つていなさい」（九節）。

エサウは「何でも十分ある」人です。要するに、彼は成功した財産家なのです。おそらく相当早く彼は、父イサク、母リベカのもとを離れたのでしょう。そもそも、エサウの二人の妻を、イサクもリベカも嫌っていた（二七・四六、二八・八）カナン人であるゆえに、つまり自分たちと同じ民族でない、異教の民であるがゆえに。長くはいられるはずありません。

エサウはお金持ちです。そのことが、現状を肯定させ、昔のことを忘れさせたのです。こうしたことは、特別のことではありません。いま十分幸せなんだから、もういいよ、というわけです。

ここまで考えると、エサウとの対比で、私ども、ヤコブの信仰に着目せざるをえないように思います。「わたしのところには何でも十分ある」、それがエサウの言い方でした。これに対して、ヤコブは同じことを、次のように言っています。

「あなたの僕であるわたしに、神が恵んでくださった子供たちです」(五節)。

「神がわたしに恵みをお与えになったので、わたしは何でも持っていますから」(一一節)。

ヤコブは(神の恵み)を口にします。「神の恵みによって今日のわたしがあるので」(コリント一、一五・一〇)とは使徒パウロの言葉です。ヤコブもまた、同じように、神の恵みによっていま私はあると言っているのです。

この信仰のゆえにヤコブは、カナンの町(シケム)に着くと、何よりもまず、土地を買って祭壇を築き、神よ、イスラエルの神(エル・エロヘ・イスラエル)と呼びかけたのでした。兄を出し抜き父を欺(あざむ)いて祝福を得ようとし、労苦し、ここまで歩んできた人、単純な人ではありません。しかし一貫したものがありません。神への信仰です。信頼です。エサウとの危険な会話の中でも、神の恵みを受けてそう言ったと彼は率直に語り、告白するのです。

後回しにしたことを、最後にここで取り上げておきます。再会のさい、エサウが走って来てヤコブを迎える場面、あの言葉が、放蕩息子の譬えの場面と重なっているところどころです。

エサウは走って来てヤコブを迎え、抱き締め、首を抱えて口づけし、共に泣いた(四節)。

まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した(ルカ一五・二〇)。

重なる申しましたが、並べて見ると、放蕩息子の譬えの神の憐れみは、圧倒的です。言い回しは似ていても、比較できないほどです。

しかし、重なっているところはあります。この譬えをイエスが語ったとき、エサウとヤコブの再会ことは念頭にあったのでしょうか。もちろん分かりませんが、イエスの譬えから見れば、ヤコブが受けとめられたことは、明らかです。もちろんそれはエサウによってではなく、神によつてです。それが重なっていることのポイントです。ヤコブは罪深い存在でありました。しかしその彼も神によつてその存在が、まるごと受けとめられた。放蕩息子の譬えから光を当てれば、エサウに抱きとめられたヤコブは、私どもに、そのように見えてきます。またそのように受け取ってよいように思うのです。

(二〇二二年一〇月三〇日)